

「英字新聞制作プロジェクト」を活用した探究成果の発信 ～総合的な探究の時間と英語科の指導の連携に視点を当てて～

英語科 津久井 貴之

はじめに

2014年度にスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、本校のSGHに関する5ヶ年の研究や取組が行われてきたが、本稿では後半の3年間に実施された『持続可能な社会の探究Ⅱ』(総合的な学習・探究の時間1単位で高3時に実施。以下、『探究Ⅱ』と呼ぶ。)における研究開発の足跡や成果・課題等を整理し、考察する¹。特に以下の点については、文部科学省研究開発指定の有無にかかわらず、他校でも取組のヒントや示唆を得ることができると考えられるので、最初に挙げておきたい。

- ・高1・2の探究学習や活動の成果をいかにまとめて発信するか
- ・一部の生徒の取組ではなく、高3生全員が探究活動のまとめとして取り組めるか
- ・他校や外部に発信するのに十分な英語の質をいかに確保するか

高校3年生が全員履修する「総合的な探究の時間」(1単位)のなかで、高1～2と行ってきた探究成果をまとめ、学年の生徒全員でクラスごとに独自色を出して英字新聞を制作するという成果発信には、探究的な学習や英語科における技能総合型の言語活動の在り方の点で汎用性と教育的価値があると考えられる。私たちの試みや取組の一部でも参考になれば幸いである。

なお、「英字新聞制作プロジェクト」とは、一般社団法人グローバル教育情報センター(GEIC)が開発した英字新聞制作のためのコンテンツと英字新聞甲子園(制作した英字新聞を出品するコンテスト)のことであり、甲子園に参加した際などにいつも温かく励ましのお言葉をいただいたGEIC代表理事の吉田研作先生、直接のご担当として高3生全員参加による英字新聞制作という挑戦を粘り強くサポートいただいた櫻井淳二事務局長をはじめ、理事の方々や関係の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げたい。

1. 本研究開発の経緯と位置付け(研究開発の際の3つの疑問を超えて)

1.1 SGHは一部の生徒のためのものか

2014年度からの2ヶ年の研究成果と課題を受けて2016年度よりカリキュラム改編を行い²、新たに研究開発を行うことになったのが『探究Ⅱ』である(表1.1)。高2の『持続的な社会の探究Ⅰ』(以下、『探究Ⅰ』と呼ぶ。)を本校のSGH研究開発の中核を担う探究的な学習として一本化するとともに、高1の学校設定科目『グローバル地理』³か

1 筆者は本プロジェクトの担当として立ち上げから関わり2019年度で4年目を迎える。本稿では、プロジェクト立ち上げ後の2年間を主担当として試行錯誤した研究と関連する英語科の取組を中心に取り上げる。

2 学校指定の研究開発として生徒全員がSGHカリキュラムの恩恵をより効果的に受けることができるように、2015年度中に文部科学省初等中等教育局国際教育課のご指導を仰ぎながら研究開発途中にカリキュラムを改編した。

3 学校設定科目『グローバル地理』の概要については、本校WEBページ内「SGHについて」を参照。

ら続く2年間の探究成果を発信する科目を『探究Ⅱ』として一本化し、その内容を英字新聞制作に変更した。主な理由は次の3点であった⁴。

(1) 生徒の負担解消

変更後は、生徒が複数の探究テーマの中から自らの関心や目的意識等に応じて1つのテーマを選択し、『探究Ⅰ』および『探究Ⅱ』においてグループ又は個人単位で探究を深めることとするため、負担の解消につながる。

(2) 探究的な学習に係る教育効果の向上

探究科目の一本化により『探究Ⅰ』および『探究Ⅱ』において2年間をかけて探究から発信までを行うことで、教員によるきめ細かな指導⁵も可能となり、生徒一人ひとりの探究が深まり、教育効果が高まることが期待される。

(3) 過去2年間のSGH指定校としての取組成果の全校への波及

選択必修を廃止し、探究的な学習のプロセスを単純化し、本校がこれまで2年間に渡りSGH指定校として行ってきた取組の成果を全ての生徒が享受できるようになることが期待できる。

【表 1.1 研究開発実施計画変更申請書別紙より】

お茶の水女子大学附属高等学校 SGH「総合的な学習の時間」に係る変更について		別紙
	〔変更前〕(平成27年度)	〔変更後〕(平成28年度～)
2年次	<p>持続可能な社会の探究Ⅰ(必修 1単位) ・探究テーマ別にグループを編制し、探究的な学習を実施。</p> <p>グローバル総合(選択必修 1単位) ・4講座(定員各15名前後)^(※1)を開講。 ・各講座で探究テーマを設定し、探究的な学習を実施。</p> <p>海外研修 ・2講座^(※2)の履習性のみを対象に実施。</p>	<p>持続可能な社会の探究Ⅰ(必修 2単位) ・生徒の関心・目的意識等を踏まえ、従来の「持続可能な社会の探究Ⅰ」に「グローバル総合」において扱っていた探究テーマの追加・再整理等を図り、計5～6程度の探究テーマを設定。^(※3) ・探究テーマ別にグループを編制し、探究的な学習を実施。</p> <p>海外研修 ※「特別活動」として実施予定(2年次対象) ・参加を希望する生徒の探究的な学習や海外研修に対する意欲・目的意識、学力、語学力等を総合的に勘案し、対象者の校内選考を実施する方向で検討中。</p>
3年次	<p>持続可能な社会の探究Ⅱ(必修 1単位) ・2年次の「持続可能な社会の探究Ⅰ」を踏まえ、探究テーマに関する個人・グループ単位での探究的な学習、学級単位での政策提言等を実施。</p> <p>グローバル総合アドバンス(選択 1単位) ・2年次の「グローバル総合」で選択した探究テーマについて、生徒各自で更なる探究を進め、成果として論文を作成。</p>	<p>持続可能な社会の探究Ⅱ(必修 1単位) ・2年次の「持続可能な社会の探究Ⅰ」を踏まえ、探究テーマに関する個人・グループ単位での探究的な学習、学級単位での政策提言等を実施。^(P)また、1年間の学習を踏まえ、成果物の作成を義務付け。 ※きめ細かく柔軟な指導体制を確保するため、担当教諭3名^(※4)及び英語科教諭1名の計4名を配置する方向で検討中。</p>
	<p><現行の課題> ○探究的な学習に係る生徒の過重負担。 ○全ての生徒が3年間に渡ってより深みのある探究的な学習を展開できるような、必修科目を軸とした改善の必要性。 ○グローバルな課題の探究や外国語によるコミュニケーション、国際交流等に関心を持つ生徒のニーズへの対応が不十分。</p>	<p><変更により期待される効果> ○探究的な学習に係る生徒の負担解消。 ○SGHの取組を推進する校内体制の強化。 ○探究的な学習に係る教育効果の向上。 ○グローバルな課題の探究や外国語によるコミュニケーション、国際交流等に関心を持つ生徒の意欲に応える学習機会の充実。 ○SGH指定校としてのこれまでの取組を必修科目の中で活かすことによる、全校への取組成果の波及。</p>
	<p><small>(※1) 〔※2〕平成27年度は「国際協力センター」(合同海外研修)、「経済発展と環境と健康とを両立させるために」(合同海外研修)、「国際関係の課題解決～平和・平和・平和～」(合同海外研修)、「海外研修」の4講座を開講。海外研修に申し込んだ生徒は計27名。 (※3) 平成28年度から生徒に提供する探究テーマとしては、「環境・防災」、「ジェンダー教育・エシカル」、「生命・健康・福祉」、「国際交流・経済活動」、「情報技術」、「芸術」等を検討中。今後変更も生じ得る。(※4) 英語科教諭は原則学級単位で行うため、各学級1名ずつ担当英語科教諭を配置。</small></p>	

1.2 高3生が探究成果を英語で発信できるのか

前述 1.1 の経緯にあるとおり、探究的な学習のプロセスを単純化し、発信までの柱を1本通すことによる利点や効果が想定できる一方、「高3生が探究成果を英語で発信できるのか」という疑問が残る。具体的には、2つの超えるべき課題を内包している。これは、多くの学校で探究的な学習の成果をまとめるという際に直面する(または避けて通ってしまう)であろう「現実的な壁」だと考えられる。したがって、ここではそれぞれについて少し丁寧に考察したい。

4 「研究開発実施計画変更申請書」(2015年11月26日文科科学省へ提出)より一部抜粋および改編。
5 探究科目を一本化することで『探究Ⅰ・Ⅱ』の担当教員を増やすことができたのは研究体制の強化につながった。

1.2.1 現実的な壁その1

大学受験を控えた高3生が探究成果の発信、つまり英字新聞制作に意欲をもって取り組めるのか

まず、本校の教育課程（45分7時間×週5日）では『探究II』に割けるのは1単位である。この1単位で12月末までの活動を行うと考えた場合に、新たに探究テーマを設定して探究活動を行い、成果をまとめて英語で発信するのは不可能であり、大学受験を控えた高3生がその目的と効果を正しく理解して意欲を保つこともかなり難しいことは容易に想像が付く。そこで、高2時に十分に行った『探究I』の活動の成果を高3時にまとめることで、探究成果と課題を一旦俯瞰して振り返り、再度自分の言葉で言語化することが可能になる。獲得した知識や技能・知見などをメタ的に振り返ることの意義は言うまでもないだろう。加えて「英語」による発信であれば、生徒のライティング能力の伸長にもつながることで生徒のモチベーションを維持しやすい。

中高における英語教育においては、ライティング指導の問題点として、①和文英訳指導が中心になってしまっている、②自由に意見や知見をまとめる自由英作文的なライティング指導を行おうと思っても生徒が「伝えたい（伝える価値のある）内容」をもち合わせていない、③言語活動をする際により現実的な場面・状況設定をすることが難しい、などが挙げられる。しかし、英字新聞制作プロジェクトは、これらの問題点をクリアしていくことができ、英語の授業で培った知識・技能を活用する機会として捉えることができる。特に③については、学習指導要領（平成30年3月告示）で述べられている「思考力・判断力・表現力等」を育成する際に多くの英語教師が頭を悩ませ、教室の中に擬似的な言語活動場面を設定することの限界と教室外に真正な言語活動場面を設定することの困難さの板挟みに合うところである。しかし、生徒たちはこの取組をとおして、実際に英字新聞制作に関わる方の力を借りながら新聞として仕上げて世に出すところまでを行うことになる。英字新聞記事という英文スタイルやフォーマットの制約・条件の中で効果的な表現を探し、読者を設定し、発信者としての立ち位置や切り口（お茶の水女子大学附属高校生、女子高生、都内の高校生など）を意識して英語で表現することになる。これは、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」⁶に他ならない。本校の英字新聞制作プロジェクトは「総合的な探究の時間」に位置付けられているものの、CLILやPBL⁷の考え方を取り入れた英語による効果的な言語活動ということもできる取組と言える。昨今の大学入試改革における英語の問題の傾向

6 「高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編」p.13より。コミュニケーションを図る資質・能力の育成には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることが重要であるとされている。

7 CLIL=Content and Language Integrated Learningのこと。教科学習と英語の学習を統合させた指導法として注目されている。「内容言語統合型学習」と称されることが多い。学習内容(content)の理解に重点が置かれ、学習者の思考や学習スキル(cognition)に焦点を当てながら、英語の4技能の伸長を図るアプローチである。PBL=Project Based Learningのこと。「問題(課題)解決型学習」と称され、英語教育においても、4技能を効果的に伸ばす取組の1つとしてプロジェクト型の学習や技能(領域)統合型の言語活動として取り入れる試みがなされている。

や技能重視の方向性を鑑みても、生徒にとっても意欲を保ちながら英字新聞制作という探究成果の発信に取り組むことができる⁸と考える。

1.2.2 現実的な壁その2

学校設定科目『グローバル地理』から『探究Ⅰ』へと高まっていく探究成果の内容や知見を発信するレベルの英語力を保証することができるのか

単刀直入に言えば、多くの高校生が母語（日本語）で行った探究成果の発信を十分に行えるレベルの英語力を有しているとは言えない。これはさまざまな英語力調査を見ても明らかであり、本校生徒は比較的英語力が高い⁹とは言え、例えば英語による論文を「自力で」作成できる生徒は2割弱だろう。むしろ探究の内容が深まれば深まるほど英語の表現力とのギャップができるはずである。筆者は、高校生が探究成果の発信としてまとめられた英語による論文集を読む機会が多いが、多くの論文がその意図や要点を理解するのに支障が生じるレベルの誤りを含んでいる。そうした論文を目にすると、本当にこの生徒は英語で論文を書くという目的を理解し、また、教師はそこまでの英語力を1つの目標として高1から英語力の伸長を目指して指導してきたのか、疑問に思うことがある。さらに、英語力が非常に高い一部の生徒の成果発表を取り上げて、英語による論文制作を探究成果としている、と学校の研究として公言するのも研究開発の趣旨からして違うだろうと考える。もちろん、全国の優れた実践の中には英語による論文が高度な探究成果の発信として機能している学校もあると思うが、本校におけるSGHの成果発信が最優先にするのは、SGHの成果や取組を全生徒に波及させることである。これを現実的なタスクとして遂行するには、生徒同士で協力し合って英文作成を行うこと、語数やスタイル、フォーマットに明確な制限や制約があり、それを守って作成すれば形になること、そして、英語科における基礎的なライティング能力の強化が必要になる。個人的に英語論文の制作を行う生徒がいてもよいが、SGHの探究成果の発信として全員が英語による探究成果の発信に関わる活動に取り組み、アウトプットとして実際に形にできる、という点で「英字新聞プロジェクト」が成果発信に適していると判断した理由はここにある。

なお、「英語科による基礎的なライティング能力の強化」に関する実際の取組の詳細は、「3 英語の授業における取組」に2017年度卒業生¹⁰を中心とした実践を紹介している。

1.3 興味・関心や『探究Ⅰ』の内容も異なる高3生同士が関わり合う活動が成立するのか

昨今、「アクティブ・ラーニング」の名の下に「生徒の学習の質を一層高める授業改善の手段」が目的化している傾向があるように感じる。現在の教育が抱える課題を

8 一橋大学の2018年度入試問題では、3つのタイトルから1つを選び、架空の新聞記事を書く英作文が出題された。この年に受験し進学した生徒の1人は、『探究Ⅱ』で学んだことも入試やその後の大学での勉強（レポート作成など）に役立つと思う」と卒業時のアンケートに感想を述べている。

9 2019年度高3生が高2終了時でCEFR B1以上が学年の77%である。

10 SGH研究開発が始まってから入学した学年であり、また筆者が高1から高3まで一貫して英語科の何らかの科目指導に関わった学年であることから本稿でその詳細を取り上げた。

一気に解決してくれる魔法の教授法のごとくその言葉と授業時の学習形態の工夫の一部が一人歩きしている状況が現にあることは、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が、全く新たな学習活動を取り入れる趣旨ではなく、外国語科においてこれまでも行われてきた学習活動の質を向上させることを主眼とするものであることに留意しなければならない。」¹¹とわざわざ高等学校学習指導要領解説（外国語編・英語編）に明記されていることからもうかがえる。この「主体的・対話的で深い学び」は授業改善の手段であると考えれば、より大切なのは、どのようなタイミングや学習内容、目指す資質や能力、学習集団に対してこの手段がより効果的に機能するのかを考え、実践することである。そして、ペアやグループ学習などの場面では、生徒の学習の質を「一層高める」学びになっているのか、教室内の生徒の学びの事実をよく見ることが大切である。したがって、『探究 II』において生徒主体で英字新聞制作プロジェクトに参加することを決定した際も、「主体的・対話的で深い学び」という手段を用いる上でこのプロジェクトとコンテンツが適しているか、という視点で検討を重ねた。実際の取組や工夫の詳細は、「2.2『探究 II』のシラバス」に譲るが、言い換えれば、『探究 II』で英字新聞制作プロジェクトを行ううえでの問題点を「弱み」としてではなく、「主体的・対話的で深い学び」という視点から「強み」に変えられるか、が『探究 II』を成功させる鍵を握っていたとすることができる。

具体的には、最も大きな問題点として当初危惧されたのが「クラス単位での実施」である。本校の教育課程編成上の制約からクラス単位での実施ありきで検討が進んでいったのだが、探究成果発信の元になる高2時の『探究 I』では、学年の中で興味・関心のあるテーマごとにグループを編成し探究活動を行う。したがって、所属クラスが異なる生徒同士のグループになる。このグループによる探究を1年間行った後に、高3時には『探究 II』で所属クラスごとに英字新聞を制作することになる。所属クラスでは、新聞紙面の都合上、掲載できる記事が6～8本程度であるため、記事作成を行うグループを新たに編成することになる（混同を避けるため、以下記事作成のグループは「チーム」と呼ぶ）。興味・関心どころか探究してきたことが異なる生徒が記事作成を行うチームを組むことになるのである。このような現実的な問題点をどのように捉え、それに必要な方策を考え、実践してきたのかを以下にまとめる。

- (1) クラスごとの新聞制作：本校の教育の特色として自主自律による学校行事運営がある。特に高2時に生徒会組織の中心となって様々な行事の企画運営を行ってきており、英字新聞制作もクラスの企画の1つとしてHRにおける話し合いや行事企画で培った力やノウハウを生かした取組とすることで、むしろクラス単位で実施することのメリットを最大化することを考えた。そして、そのために新聞制作の編集長および編集部を各クラスに設置し、基本的に編集部の数名が新聞制作の中心となり、担当教員（各クラス1名）がHRによる話し合い活動などと同様にあくまで支援する形とした。新聞制作では、記事作成以上に紙面割が重要なポイントに

11 高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編 p.123 より一部抜粋。

なる。これまでにクラスで培ったコミュニケーション能力や主体性、協働性、リーダーシップを発揮させ¹²、新聞全体のテーマや読者の設定、記事の方向性や独自性について、生徒たちが検討・選択をする責任と主体性をもたせる形とした。

また、『探究Ⅰ』での探究グループと『探究Ⅱ』における記事作成チームが異なることで、どの探究課題を記事にするのか、クラス全体やチーム内での話し合いや、各自が『探究Ⅰ』の成果について説明し合う場面が必要になるため、そうした言語活動を設定した。

(2) 興味・関心や進路志望の違い：記事作成のチームが6～8、1チームが大体3～6人程度となる。『探究Ⅰ』の探究グループが解体されることで、一旦グループ内での役割をリセットし、新たにチーム内で自分の強みを生かした役割を生徒たちは探してチームに貢献することになる。受験期を迎えた生徒たちであるからこそ、互いに効率よく助け合いながら記事作成、新聞制作というゴールの達成に向けて協働的に活動することが求められる。チーム内の役割を例示し、チーム内で1人1役で責任をもって行う分担をチームのニーズやメンバー構成を考慮しながら決めさせるとともに、授業内で行うこと（チームで行う活動）と授業外で行うこと（個人でもできる作業）を明確にするよう伝えた。また、チームとして方向修正や改善ができるように、チームの活動や分担、作業の進捗状況について振り返らせる場面を設定した。こうした支援や工夫により、生徒は『探究Ⅰ』で自身が追究してきた内容とは異なるが、探究方法や検証方法、成果の表現の仕方や工夫など、方法面で貢献することができる。実際、海外大学への進学を考える生徒が英文記事のドラフト作成の中心になったり編集部としてクラス全部の記事の英文校正をしたりした。さらに、理学・情報系学部への進路志望をもつ生徒が図表作成やデータの整合性の責任者としての役割を担うなど、違いを多様性として受け入れ、強みに変えていくことがチームによる記事作成やクラスによる新聞制作の成功のカギになることを学んでいくのである。

(3) 高3生で個人ではなくクラスやチームで取り組むこと：前述のとおり、学校の教育課程編成上の制約でそのようになってしまったというのが事実であるが、結果的には、「主体的・対話的で深い学び」を実施するうえでは良いタイミング、学年であると考えられる。なぜなら、高1からの2年間の教科の学習による知識・技能の蓄積や探究方法の学習を踏まえてこそ「深い学び」の実現があると考えられるからである。協働的な関わり合いの中で、既存の知識と知識を統合して新たな解決策や方向性を見出し、また、既に学習した考え方や表現方法と要求される場面や状況、条件を照らして最適な表現方法で記事作成をするのであれば、高1時よりは高2時、そして高3時の方が深い学びが起きる可能性が高くなるはずである。

¹² 本校では、高2から高3時にクラス替えがない。高い協働性や安定した学習集団づくりという点でクラス単位での新聞制作におけるメリットになった。

したがって、それぞれの課題をむしろ強みに変えて取り組める「発信」の（ベストとは言わないがベターな選択肢としての）活動こそ英字新聞制作であると考えられる。

こうして、さまざまな疑問や問題点、課題を抱えながらも検討と試行錯誤を繰り返しながら『探究Ⅱ』の英字新聞制作プロジェクトは進んでいくことになる。次章ではここまでの考え方や方向性を踏まえた具体的な教育実践の一端を紹介する。

2. 研究開発の実際

2.1 『探究Ⅱ』の目標

『探究Ⅱ』の目標は以下のとおりである。また、（ ）内の能力は、ルーブリックとの対照関係を示している。¹³

- ・『探究Ⅰ』の追究成果や既習の知識や技能を活用して、読み手を意識した英字新聞を作成することができる。

（創造的思考力・批判的思考力）

- ・作成した新聞を基に、担当した記事やその内容に関連した事柄、自身の考えなどについて、メモやアウトライン、数枚のスライドなどを用いて英語でプレゼンテーションすることができる。

（批判的思考力・創造的思考力）

- ・集団に協働的・主体的に関わり、コミュニケーションやディスカッションを通して学び合い、課題や場面、状況に応じて自律的に学習や活動を進めることができる。

（協働的思考力）

2.2 『探究Ⅱ』のルーブリック（p.100「別表1」参照）

本ルーブリックは、「別表2 年間シラバス」中の評価の観点と能力記述文を具体化したものである。指導や活動の際の目的や目標の目線合わせを行ったり、指導計画を見直したりする際に用いる。評価場面における具体的な評価基準については、このマスタールーブリックを基に作成する。

評価の観点は、以下の3つである。

(1)「批判的思考力」 (2)「協働的思考力」 (3)「創造的思考力」

外部指標による客観的評価と連動させるため、ルーブリックを作成する際には、GPSアカデミックテスト¹⁴の「CAN－DOリスト」を参照する。最終的な評価（通知表・要録）は、生徒個別に文章で記述する。また、生徒の具体的な活動場面、成果物等を

¹³ 生徒には、目標（「～できる」の形で記述した文）を示し、2.2のシラバスとともに『探究Ⅱ』のガイダンスで説明を行った。

¹⁴ GPSアカデミックテスト（GPS-Academic）とは、ベネッセ・コーポレーション開発の思考力などの汎用的能力や主体性などの態度を測定するツールのこと。本校では高1・2年時に実施。

基に、ルーブリックを随時修正する。

2.3 『探究 II』のシラバス及び新聞制作の実際

主な活動内容や活動の手順は以下のとおりである（詳細は p.101 「別表 2 年間シラバス」参照）。

- (1) 『探究 I』で探究活動を行った成果や課題の共有を図る。
 - ・春休みを活用して高 2 時の探究成果のサマリーを生徒各自が英語で書き、それを報告し合う言語活動を行うことで共有を行う。
- (2) 編集部（4～6人）を編成し、編集長のリーダーシップの基に、チームおよびクラス全体で協議し、クラスごとに紙面割および記事の内容を決定する。
 - ・授業中の話し合いや運営などは編集部の生徒が中心に行う。
- (3) 「英字新聞制作プロジェクト」のコンテンツ¹⁵を活用した学習や、新聞制作プロセスの確認・修正を行う。
- (4) 記事の添削をチーム内およびチーム間で行うとともに、編集部は、全ての記事の校正や紙面の全体構成、内容のバランスを踏まえた指導や支援を行う。
- (5) 本プロジェクトの取組について自己・相互評価を行うとともに、次年度の生徒に向けたアドバイスやコメントを書く。
- (6) 完成した記事を鑑賞し合い、それぞれの新聞の特徴やこれまでの取組の成果や課題を共有するとともに、英語による簡単なプレゼン、質疑応答などを行う。
 - ・2017 および 2018 年度は、SGH 発表会で、1・2 年生に対して 3 年代表生徒 4 名が英字新聞制作から学んだことや新聞作成のアドバイス等を英語でプレゼンしている。

2.4 新聞記事の変容について（初稿作成から完成まで）

ここでは、英字新聞甲子園で準優勝に輝いた新聞の第 1 面の記事を取り上げ、7 月→10 月→1 月と、どのように英文やタイトルなどが校正を経て変化したかを見てみたい。なお、初稿原稿は新聞のフォーマット（段組）にはなっておらず、10 月末より新聞のフォーマットに英文記事を流し込んだ形になっている。『探究 I』で取り組んだ成果（カンボジアの子供たちの学習を手助けするワークブックを制作し、現地に届けるといった実践的な活動）を取り上げた記事である。

2.4.1 初稿〈7月末〉

英文記事には、[] で数字が付されており、英語の表現や展開、記事の内容としての適切さなどについて GEIC より示されたサジェスチョンが注釈の形で英文の後に書かれている。生徒たちはこのコメントを基にチーム内で協力しながら、新聞記事を仕

¹⁵ GEIC より付与されるログイン ID を用いて新聞製作のノウハウに関する WEB 上のコンテンツを活用、またはダウンロードして資料として用いる。

上げることになる。英字新聞甲子園では、このサジェスチョンからどのように生徒たちが記事を校正・修正させてくるかも評価の対象としている。教師は、チームの作業が行き詰まるようなことがなければ基本的にアドバイスを送ることはない。これまでの『探究 I』や英語の学習で培った知識・技能や思考力、協働性などを総動員して、あくまで生徒たちが自力で英文記事を仕上げるのである。

それぞれのサジェスチョンは英文ライティングの指導の点から見ても興味深いものが多い。基本的な代名詞の使い方や語法から英字新聞記事における主語の立て方などのスタイル、そして新聞で伝えようとする要点やメッセージなどについて幅広く詳細にコメントされており、教師の側も英文のライティング指導の参考になった。

以下が実際の生徒たちの初稿（サジェスチョン入り）である。写真および脚注については割愛した。

Educational Support to Cambodia
(Hashimoto(leader), Urano, Mizuno)

[1]With what do you associate “Cambodia” ? Some may imagine streets with many stalls and the grand, majestic Angkor Wat (Photograph 1), while others may think it to be the country of poverty. In fact, both are truth. There is a considerable gap between the urban and the rural. In a small commune named Thonat, the southeastern part of Cambodia, [2] is also suffering poverty. About 20% of children in Cambodia cannot go to school (from the State of the World’ s Children 2016), and children in Thonat are placed in more severe condition. [3]Instead of it, they are engaged in child labor[4]: begging, and working in casinos, factories, or construction sites. [5]Without education, they grow up. Then, they will face more challenges than the educated. [6]They cannot know which way to go to reach their destinations, cannot decide what medicine to take to cure diseases, and can be overcharged by clerks. It is because they cannot read signs, labels, and cannot calculate prices. That is, lack of literacy causes all these problems, and the only way to solve them is education.[6]

We focused on [7]it, and made up our mind; presenting [8]them with [9] workbooks which [10]we ourselves make! [11]Please let us explain the reason in detail. Since [10] we were originally interested in [12]gender inequality in developing countries, we were trying to come up with the solution when we discussed in the SGH (Super Global High school) classes. [13]Governments can enact the law on it, or members of some non-profit organizations (NPOs) can talk citizens into accepting gender equality. Though such things are hard for us high school students, we realized that, as we stated above, there is a complex educational problem which is far more serious than the gender problem, and that these problems must underlie gender inequality in developing countries. As for education, we must be able to take action with our own knowledge somehow. Then, we concluded that making workbooks was the best way because the children could use them again and again, and could study without going to school if we added precise explanation. This is why we

decided it.[14]

We expended over 3 months on making the workbooks, and finally completed them in February 11[16]. Photograph 2 shows actual workbooks and stationeries, which we collected from our schoolmates and [17]presented with them. Workbooks consist of mainly three parts: geography, vocabulary, and arithmetic. When making them, we took a variety of situations into consideration. For instance, they allow the children to learn about both [18]Khmer, the language spoken in Cambodia, and English, which are used in their daily lives,[19] and contain pictures that do not express stereotypes about gender for [20]LGBT children. In addition, their contents are information from common knowledge to [21]a little advanced one to adapt to children from the young to the old. Photograph 3 shows the time when our workbooks were given to Cambodian children. They seemed to be a little surprised, but [22]we are sure that they like them. C-Rights, a certified NPO that works towards the realization of the rights of all children around the world (from the website of C-Rights), asked local people to look over [23]them before that and brought [23]them to the children. Since there is still much information we want to add [23]them, we are planning to make “Version 2” in the near future.

“Only a small step can help people in developing countries.” This is what we learned through this precious experience. Today, more and more organizations provide us opportunities of volunteer or donation. Besides, more and more corporations sell products, which benefit [24]these people. There are quite a few chances around you, so let us take action together![25]

689 words and 78 words (footnote)

< GEIC からのサジェスション >

- [1] 新聞では通常読者に呼びかけることはありません。客観的事実として、カンボジアの特徴を簡単に説明する文章からはじめてはどうでしょうか。そのうえで、記者のみなさんが焦点をあてたいカンボジアについて語るという構成をとってはいかがでしょうか。
- [2] A is suffering from B ですね。
- [3] Instead 一語で、前文の状況にもかかわらず、ということを示すことができます。または、現状は It が何を示しているかわかりません。Instead of such situation でしょうか。具体的に書きましょう。
- [4] コロンを使うという試み、素晴らしいです。コロンは「つまり」や、コロンの前のものとイコールの関係にあるものを示す時に使用します。さて、Child labor は児童労働ですので、begging を含めることはできないと思います。Child labor, such as ならば begging も並列で含めることができますと思います。
- [5] education だけだと家庭教育も含んでしまいます。School education でしょうか。
- [6] 厳しい状況を伝えたい気持ちはとてもよく分かりますが、新聞という媒体上、主張には裏付けが必要です。客観的な事実を述べ、その上で記者の主張を読者が納得して受け入れられるような書き方をしてみましょう。具体的には、カンボジアの学校に行っている子どもたちは、このような問題に直面する機会が少ない、または直面しても対処できる能力が身につけている、というような事実を述べることはできないでしょうか。

- [7] it の示すものがわかりません。
- [8] them の示すものがわかりません。
- [9] なんの workbook ですか。
- [10] we は誰ですか。また語順を確認しましょう。We made by ourselves です。新聞では記者は匿名性を重視されるのではないかと思います。それは新聞が客観的な事実を伝えるメディアだからだと思います。もしよろしければ記者の匿名性について調べてみてください。この文章に限らず、新聞では一人称単数複数 (I, We とその活用形) は使用しない決まりになっています。これらを避けて表現する方法を考えましょう。テキストも参照してみてください。
- [11] 口頭プレゼンテーションならばこの文言は必要ですが、今回は新聞です。この記事を読者が読んでいる時点で、読者は説明を待っています。ですのでこの文章は不要です。
- [12] 脚注がありますが、専門用語ではないので脚注を付ける必要はありません。
- [13] ここからの文章は「(1) こういう方法もあるだろうが、(2) 実際には難しい」という流れになると思います。(1) について、根拠がありません。誰か専門家が言っていましたか。データがありますか。根拠がないと主観的な主張に終わってしまいます。(2) について同じく本当に難しいのかわかりません。客観的に読者が納得できるような構成を目指しましょう。
- [14] workbooks を作るという決断をした経緯について書かれていますが、gender inequality の話が入ってきました。ここまで学校教育の重要性について語られていたましたが、gender inequality との関連について説明が不足しています。また読者に読んでほしいのは(1) workbook をつくることになった経緯(2) gender inequality と school education の関係のどちらですか。話の方角を定めて、読者が理解できる順番で情報を提供しましょう。
- [15] 1 ~ 10 までは one, two, three…と文字で表記します。
- [16] 何年ですか。
- [17] 英語でプレゼントを贈るときには send を使用します。Present(動詞)の意味を確認しましょう。
- [18] 表現が主観的です。クメール語は公用語、という説明ではどうでしょうか。英語は公用語ですか？それとも第二言語として学校で教えられているのですか。
- [19] 文章が長いのでここで一旦切って新しい文章を始めましょう。
- [20] LGBT も一般的に使用される語なので脚注は不要です。なぜ LGBT への偏見を生まないような写真を入れるに至ったのですか。
- [21] 具体的に説明しましょう。
- [22] やはり we が誰なのか分からないので、文脈が追えません。また、文章の書き方がエッセイ風になっています。テキストを参照し、新聞らしい英語、表現はどのようなものであるのか確認してみてください。
- [23] them が何を示すのか読み取れません。
- [24] these が何を示すのか読み取れません。
- [25] 全体として御校の学生が御校の学生に対して書いたエッセイという印象を払しょくできません。今回は英字新聞で、読者は御校の学生も含まれますが、新聞となる以上幅広い読者(英語話者を含む)がこの記事を読むということを想定に入れて推敲してみてください。

2.4.2 Student 版原稿（英字新聞甲子園提出原稿）〈10 月末〉

タイトルの作り方について、英字新聞独特の言い回しや文法については、GEIC 提供のコンテンツで学習してきたものの、生徒たちは苦戦していたようである。再度実際の英字新聞を見直して修正したり編集部意見に意見を求めたりして決めたようである。

この後の Professional 版（「2.4.3 Professional 版原稿」参照）は、プロの方の校正が入った記事である。タイトルの違いに生徒たちは驚くとともに、読み手を引きつけつつ端的に分かりやすい英語で表現されていることに感心していた。比べて読んでいただきたい。

Educational assistance required to



Kaoru Hashimoto

Angkor Wat, the symbol of Cambodia

In the world, 58,000,000 children are not receiving school education, the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) said in the 2015 Education for All (EFA) Global Monitoring Report. In 2015, the UN adopted Sustainable Development Goals (SDGs), as “a universal call to action to end poverty, protect the planet and ensure that all people enjoy peace and prosperity”. Goal 4 aims at resolution of educational issues, by “ensuring inclusive and quality education for all and promoting lifelong learning”.

UNESCO is playing a leading role in accomplishing this goal. In 2016, this organization carried out a project to support education systems in 16 villages of Siem Reap, Cambodia. According to the organization, these villages have mainly three problems: many dropouts from school, unsteady income, and shortage of human resources. High dropout rates involve many causes such

as poverty, and the lack of parents’ understanding of school education. Since droughts and floods often occur, the majority of residents, who are farmers and do not have enough skills to earn money from the second jobs, is leading a life with poverty. Human resources are so limited, because of a massacre by the Pol Pot regime in 1970s.

Sixteen primary schools built in these villages by the organization contributed to solve these problems by providing many kinds of courses with local people. A course was conducted for children who once dropped out from school, and this course enabled them to complete a curriculum of six-year primary school within two years. The other courses were for adults, and they could acquire abilities to read and write, or master techniques of doing handicrafts, raising livestock, and farming. UNESCO also put emphasis on training local teachers, and as a result, three schools are now

independent of support by this organization.

Ochanomizu University Senior High School students also took part in educational assistance in Cambodia, in 2017. C-Rights, a certified non-profit organization (NPO) collaborated with them. In Thonat, a commune where the project was conducted, many children have never been to or dropout from primary or secondary schools, and are begging, and engaged in child labor in casinos, factories, or construction sites. The major cause of this situation is that parents do not understand the importance of school education and regard their children as breadwinners of families, C-Rights said.

After laminated to keep in a good condition in humid air in Cambodia, these workbooks were sent to the children. Their workbooks are now contributing to the children’s acquisition of knowledge. “In near future, we would like to create ‘Version 2 workbooks’ with much more information, because we believe that it is essential to continue to solve educational problems at personal level. Though it may seem a little difficult at first, anyone can do it,” the students said.

As Malala Yousafzai said in her speech at the United Nations in 2014, “Education is the only solution” to fight against various issues in today’s world. To realize SDGs, the UN is calling



Nanaka Urano

The workbooks made by the students

The students made workbooks to help children in Thonat who cannot receive school education. These workbooks contain arithmetic with bills, vocabulary of Khmer and English, and simple maps so that they can gain minimum necessary abilities needed in their daily lives.

for everyone “to do their part: governments, the private sector, civil society, and people like you”. Leave no one behind.

By Nanaka Urano, Kaoru Hashimoto, Yuiko Mizuno

2.4.3 Professional 版原稿 (GEICによる校正後の原稿) <1月末>

Professional 版とは、生徒たちが自力で仕上げた記事のメッセージや文意は失わない程度に GEIC による校正を入れた、いわば最終完成版のことである。生徒たちは、この完成版を手に取り、自分たちの作成した記事との違いに驚いたり感心したりしながら新聞を読む。効果的な写真の配置や大きさなどは編集部の生徒たちが気になるところである。

EDUCATION VITAL FOR CAMBODIAN KIDS



Angkor Wat, a symbol of Cambodia

Around the world, 58 million children of primary school age are not receiving any education, the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) said in the 2015 Education for All Global Monitoring Report. In 2015, the United Nations adopted Sustainable Development Goals as “a universal call to action to end poverty, protect the planet and ensure that all people enjoy peace and prosperity.” Goal 4 aims to resolve educational issues by “ensuring inclusive and quality education for all and promoting lifelong learning.”

UNESCO is playing a leading role in accomplishing this goal. In 2016, this organization carried out a project to support education systems in 16 villages of Siem Reap, Cambodia. According to UNESCO, these villages have

three main problems: many students drop out of school, unstable income and a shortage of human resources. High dropout rates are often the result of the parents’ lack of understanding about school education. The majority of residents are farmers and do not have enough skills to earn money from second jobs, and they lead lives of poverty in areas frequently affected by floods and droughts. Human resources are limited because of the mass killings committed by the Pol Pot regime in the 1970s.

Sixteen primary schools UNESCO built in these villages helped solve these problems by providing many courses for local residents. One course conducted for children who had dropped out of school enabled them to complete a six-year primary school curriculum within two years. Other courses

taught adults to read and write, master handicraft techniques, raise livestock and grow crops. UNESCO also put emphasis on training local teachers and, as a result, three schools now operate without any support by this organization.

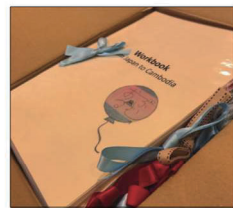
Ochanomizu University Senior High School students took part in an educational assistance project in Cambodia in 2017. C-Rights, a certified nonprofit organization, collaborated with them. In Thonat, a community where the project was conducted, many children have never been to primary or secondary school, or they dropped out before completing their education. Many beg or work as child laborers in casinos, factories or construction sites. The major cause of this situation is that parents do not understand the importance of school education and regard their children as breadwinners for their family, according to C-Rights.

The students made workbooks to help children in Thonat who cannot receive schooling. These workbooks contain arithmetic equations featuring examples involving banknotes, vocabulary in Khmer and English, and simple maps so they can acquire the minimum abilities needed in their daily lives. These workbooks were laminated to keep them in good condition even in Cambodia’s

humid climate and then sent to the children. The workbooks are now helping children learn important knowledge. “In the near future, we want to create an updated version of the workbook containing much more information, because we believe it is essential to continue to solve educational problems at a personal level. Though it may seem a little difficult at first, anyone can do it,” one of the students said.

As Malala Yousafzai said in her speech at the United Nations in 2013, “Education is the only solution” for various issues in today’s world. To achieve the Sustainable Development Goals, the United Nations is calling for everyone “to do their part: governments, the private sector, civil society and people like you.” Leave no one behind.

By Nanaka Urano, Kaoru Hashimoto, Yuiko Mizuno



Workbooks students made for children in Cambodia

Student 版と Professional 版を比べて読むこのプロセスが最も生徒たちにとって新聞記事作成や英語の表現の仕方など学びが多い活動になる。実際には、高3生の1月の時期には十分な活動時間が確保できないと思われるが、記事作成の時期を前倒ししたり年間シラバスを見直して改善したりするなどして、以下の活動を充実していきるとよい。

- (1) 2つの版を比べ、作成した記事について英語の表現、構成、新聞としてのレイアウト、タイトルなどの観点からその特徴や意図を考察する。

- (2) クラス間で交流し、他クラスの新聞と比較してその良さや特徴を評価し合う。また、各クラスの編集部同士でレイアウトや段組の工夫、特徴について評価し合う。
- (3) 3クラスの全ての新聞記事から、生徒たちが最優秀記事を選ぶ相互評価を行う。

2.4.4 Readability（読みやすさ）の指標による検証

初稿、Student 版、Professional 版の英文について、Readability を測定した。2018 年度卒業生と現高 3 生には、英文記事作成前にこの指標を説明し、英文を読んでどの指標がどの版に当たるのかを生徒たちに考えさせる活動を行った。

あくまで生徒が作成した新聞記事と新聞記事作成のプロが構成した原稿を対照的に見たり、生徒たちが英文を書く際の語彙のバリエーションや英文の質に生徒の意識を向けさせたりする指標の 1 つとして活用している。¹⁶

ここでは、下から 2 番目の“Flesch-Kincaid Grade Level”という数値に注目したい。初稿からサジェスションを受けて書き直した Student 版で 9.4 → 13.6 と数字が大きく変化している。染谷（2009）は、8～10 くらいが平均的な大学入試の長文問題のレベルであるとし、「リーダビリティ 13 というのは、大学入学時ではなく、卒業時に（かつ、一部の優秀な学生において）到達していることが期待されるレベルである。」¹⁷としている。本校の生徒たちがチームで協力しながらサジェスションを生かして英文の質を高めていったことが分かる。

<初稿>	< Student 版>	< Professional 版>
読みやすさの評価		
Counts	Counts	Counts
Words 615	Words 555	Words 554
Characters 3,088	Characters 2,938	Characters 2,976
Paragraphs 5	Paragraphs 6	Paragraphs 5
Sentences 35	Sentences 26	Sentences 27
Averages	Averages	Averages
Sentences per Paragraph 8.7	Sentences per Paragraph 4.3	Sentences per Paragraph 5.4
Words per Sentence 17.4	Words per Sentence 21.3	Words per Sentence 20.5
Characters per Word 4.8	Characters per Word 5.1	Characters per Word 5.2
Readability	Readability	Readability
Flesch Reading Ease 57.2	Flesch Reading Ease 35.4	Flesch Reading Ease 34.6
Flesch-Kincaid Grade Level 9.4	Flesch-Kincaid Grade Level 13.6	Flesch-Kincaid Grade Level 13.5
Passive Sentences 0%	Passive Sentences 0%	Passive Sentences 0%

こうした取組により Readability を英語の授業で課したライティングに活用して自分が書いた英文を検証する生徒も現れるなど、今後も英文の質を向上させる取組の 1

16 染谷（2009）では、Readability の英作文への活用について、自分の書いたものを客観的に自己評価・診断できるように導いていくことを提案しているが、「対象テキストの内容的な複雑さ（または簡明さ）や論理性、文法性、使用語彙の具体性・抽象性、結束性や一貫性、あるいはディスコースの文化的・政治的・思想的な偏りや特徴、さらに読み手の読解意図や動機といった、本来、テキスト読解に大きな影響を与える質的要素は一切考慮されておらず、機械的に適用すると大きな間違いを犯すことになる。」(p.19) とその限界や課題についても触れている。

17 染谷泰正（2009）『オンライン版「英語語彙難易度解析プログラム」(Word Level Checker) の概要とその応用可能性について』、青山学院大学文学部紀要 p.19 より

つとして活用の可能性を検討していきたい。

3. 英語科の授業における取組（2017年度卒業生の取組例）

3.1 技能（領域）統合型の言語活動を中核に据えた授業展開（高1～2）

高3時に探究的な学習の総まとめとして「英字新聞制作プロジェクト」があることも踏まえ、グローバルな諸課題をテーマとして扱う単元で、ある程度まとまりのある英文を書く活動を行う必要があると考えた。高1・2時の『コミュニケーション英語I・II』（いずれも45分4単位）において単元に軽重を付け、「技能（領域）統合型大単元¹⁸」を設定して高1・2で4単元程度実施した。

<技能（領域）統合型大単元の例>

時期	扱う内容	書くこと（英字新聞制作）に関連する言語活動
高1	Roots & Shoots 環境保護と人間の経済活動の バランスについて考える	チンパンジー研究者の講義の映像視聴及び日本の高校生に向けて書かれたメッセージ文を取り上げ、それらを基に英語で返事や質問を書く。
高1	Coffee and Fair Trade コーヒーから適正な労働環境 を考える	小作農として働く労働者の労働環境や Fair Trade のしくみなどを扱った英文を読んだり、Fair Trade を扱った動画を視聴したりしたことを基に日本でもできる活動についてディスカッションを行い、英文に書いてまとめる。
高2	Machu Picchu: City in the Clouds 世界遺産に登録されたことによる 変化について学ぶ	世界遺産をネットや書籍で調べ、タブレット端末に入れた数枚の写真やデータを使って生徒各自が選んだ世界遺産の紹介を行う。活動後に、100語程度の英文で簡単な紹介文を作成する。
高2	Emotions Gone Wild 動物の知性や感情に関する 心理学の説明文から動物の 人間のコミュニケーション について考える	「人間と動物の違い」「心理学的なアプローチに基づく「感情」の捉え方の説明」「チンパンジーの知性」「自由テーマ（動物や動物の知性と感情に関するテーマを選ぶ）」の4テーマから1つを選び、グループごとにPBLを行う。プレゼン（ミニレクチャー）は各生徒が行うとともに聴き手が要点を理解したのかを確かめるための英語によるワークシートを作成する。また、調べたことを英文でレポートにまとめる。

上記から Emotions Gone Wild の大単元の単元指導計画を一例として次頁に示す。教科書題材を活用しながら、全13時間の単元を構成した。さまざまな言語活動を行いながら、12・13時間目にライティングを行う活動を設定している。単元全体をとおし

18 主に社会的な話題を取り上げ、聞いたり読んだりしたことを基に書いたり話したりするなど、2つ以上の技能を絡めた言語活動をスパイラルに行う単元を指す。通常は1単元に8時間程度を充てるが、10時間以上を割き、教科書本文に加えて、映像資料や教科書外の読み物（雑誌、新聞記事、エッセーなど）を用いて表現活動の基になるインプットや話し合いなどの言語活動の充実も図る取組である。また、授業時間捻出のため、他の教科書単元を2レッスンカットしている。

て複数の技能（領域）を統合した言語活動をスパイラルに設定している。

<技能（領域）統合型大単元 Emotions Gone Wild（高2）単元指導計画>

Period	Contents and Activities
1 st	Oral introduction of animal' s intelligence and emotions Guidance of the project-based learning process through the lesson and the collaborative learning in the presentations of what they have learned
2 nd	Oral introduction, Reading comprehension of Part 1 Introduction of the new words and idioms
3 rd -6 th	Project Based Learning in four Research Groups (The main materials to deal with) Group A: Lesson 8 Part 2 & 3 / primary and secondary emotions, the definitions of emotions Group B: Read On! 8 / intense interest, engaged curiosity, eager anticipation, brain science Group C: Revised Articles from Jane Goodall Institution, articles and movies students (hereafter, Ss) choose / animal' s intelligence Group D: Articles, movies Ss choose / Free topics on animal' s intelligence and emotions
7 th	Sharing the individual goals, the strategies that Ss use in their presentations Presentation Practice in pairs in the Research Group [Practice 1] (To raise the awareness of their own goals and the strategies in the presentations) Reflection and peer-feedback about each presentation are included in each presentation practice (Practice 1-5)
8 th	Presentation practice in pairs in the Research Group [Practice 2] (To have Ss self-monitor of the presentation with smartphones or tablets) Presentation practice in pairs in the Research Group [Practice 3] (To have Ss improve the introductory part of the presentation)
9 th	Presentation Practice in pairs in the Research Group [Practice 4] (To have Ss confirm the improvement and the points to be improved) Presentation Practice in new pairs [Practice 5] (To have Ss understand the situation of Jigsaw Activity, in which each member does not know about the contents of individual presentation so that she should be careful of how to present and explain her main ideas clearly)
10 th 11 th	Presentation (Jigsaw Activity ¹⁹)
12 th 13 th	Reading comprehension of Part 4, Read On! 8, and the articles in Group C and D Writing an essay on animal' s intelligence or emotions with the knowledge from the Jigsaw Activity and the problem-based learning in groups

19 Jigsaw Activity とは、探究型学習の成果をプレゼンするために、上記A～Dの4グループから1人ずつが集まり、成果を共有するためのグループ（4人1組で10グループ）を再編して、それぞれの資料についての紹介や要約、意見、感想などを生徒1人ひとりが責任をもって伝え合う、Information gap を活用した活動のこと。

3.2 「書くこと」に関する主体的な取組およびパラグラフィティング指導の充実

高1の4月から高2の3月までの間、生徒たちは自主的な英語学習の記録を残していく「自学ノート」の取組を行ってきた。この取組では、生徒がノートを用意し、自由に英語の学習に取り組み、長期休業明けに定期的に、また、個人の英語学習の興味・関心、課題に応じて随時提出する。「ノートに書くこと」が取組の中心となるため、4技能のうち特にライティング能力の伸長につながると考えられる。以下にそのねらいや工夫などをまとめる。

<自律性とライティング能力を高める「自学ノート」の取組>

(1) 目的

英語学習における自律性を高め、生徒それぞれのニーズや目標、課題に応じて適切な学習方略を選択できるようにする。

(2) 支援の工夫や留意点

- ①生徒に選択の自由をもたせる。自律性を高める指導・支援の中で生徒の表現意欲を高められるよう、学習内容については生徒の選択に任せる。ただし、過去の生徒たちのノートや取組の工夫を閲覧できるようにファイルを用意し、生徒が自分に合っていそうな取組や学習方法を参考にできるよう支援する。
- ②長期休業などまとまった家庭学習時間が確保できる時は、学習目標の設定とその目標に対する振り返りを書かせることで、学習に対する自己調整力を身に付けていけるよう支援する。
- ③学習方法や工夫の共有の場を設ける。定期的に生徒同士で互いのノートを閲覧したり学習内容や方法について話し合わせたりすることで、生徒同士で学習方略や学習方法の多様性について学び合うことができるよう支援する。
- ④英語通信を月に1～2度程度発行し、より効果的な取組について他の生徒のノートのコピーを共有したり、その取組の効果やねらいなどについて解説したりすることで、生徒の意識が学習内容や方略の多様さからより効果的な方略や学習内容の選択に向かうことができるよう支援する。
- ⑤生徒が学習方略や自分自身の学習スタイルへの理解を深めるとともに、高1から高3へと教師の指示や取組の条件などをなくしていく。

《長期休業前の生徒への指示の例》

- ・高1の7月：ノート10ページ以上取り組むこと。ただし、選択肢として設定した5つのコース学習から1つを選択して行うこと。また、夏休みの英語学習の目標をノートの最初に記入し、日々の英語学習の取組内容・時間・振り返りを記入する学習記録表をノートに添付して提出すること。
- ・高2の12月：ページ数は問わない。TED Talks から1本映像を視聴してその要約と感想を書くライティングを必ず入れること。
- ・高2の3月：提出は問わない。これまで学習した英語学習の方法や個人の英語学習の目標や課題に合わせて取り組むこと。希望があれば書かれた意

見文などのライティングについては添削を行うのでその際は提出してください。

⑥書かれたライティングについては、原則として肯定証拠²⁰を残し、概ね1～2学年程度前の既習事項であり、意味の理解に支障をきたす誤りについては日本語でコメントつける。また、内容については、英語でコメントを行うことでwritten interaction（書くことによるやり取り）を行い、生徒の意欲を高められるよう支援する。

<生徒の自学ノートの取組例1（2017年度高1生の冬の家学習）>

9

→ Great idea!!!

12/26 政経のしよメ英語 ver. 兼用のしよメ課題を解決できる
ビジネスモデルも考えよう

We payed attention to

THE RAILROAD INDUSTRY

[1. subject]

[2. countermeasure]

Build secondary infrastructure which means the pursuit of comfort unique to train.

The provision of service, equipment combined with informatics

we propose

To develop "Mamorus" = (Traffic IC card with a buzzer function)

(system)
By developing the sticker which can connect to train by Bluetooth people need will be able to ring a buzzer in a train.

[3. efficacy]

▷ Deterrance of proper

- by carrying traffic IC card, people always have a buzzer and they can use it anytime by linking computers to this system they can analyze proper and will be useful for entertainment

▷ rescue measures

- When people feel sick in the train they can quickly to let others know their situation. They don't need emergency stop, so delay will be prevented.

Mamorus can support using trains comfortably!

10

祝! 三日お休回避!! You made it!!!

12/27 英検 (197~618)

504 ensure ~を確保=する

505 adverse 有害な影響

512 turmoil 混乱

520 as a tribute to ~に敬意を表して

521 turbulence (気象)の乱れ, 暴動 (風浪)の乱れ

525 terrain 地形, 領土

529 revolt 反乱, 暴動 in revolt 反乱に起る

531 exertion 労力, 活動 (仕事) の力

545 excerpt 抜粋, 引用

549 convey ~を伝える

555 tranquil 穏やかな

558 diverse 多様な

559 botanical 植物の

561 burn off ~を消費する

567 majestic 威風凛々

574 weary 疲れた

587 filthy 汚い

589 catastrophe 大惨事

593 authentic 本物の

596 devastate (物で場所)を壊滅させる

598 confidential 秘密の

599 bankrupt 破産した

602 inquire ~を尋ねる

603 valuation 見積り

608 inmate 囚人

610 subsequent それ以降

611 prosecution 起訴

612 retrieve ~を取り戻す

613 hasty 急ぎの

「水、何て言うの?」を調べてみた!

年賀状 → New Year's card	年末 → year-end
福袋 → a bag filled with random products and sold at a discount after New Year's Day	除夜の合衆 → the New Year's Eve be
年賀 → mailing	忘年会 → a year-end party
お節料理 → Japanese New Year's cuisine	→ customary year-end
年賀会 → New Year's party	掃除 → cleaning
お雑煮 → sweet bean-paste soup with rice cake	年越し → year-end
一日お正月に → Plans for the year should be made on New Year's Day.	→ the soba noodle(s) eat on New Year's Eve.

左ページには、『政治・経済』の授業の取組を英語学習に取り入れて英語でレジユメを作り直す活動を行っている。また、この生徒は海外在住経験など特別なバックグラウンドがあるわけではないが、1年時から自学ノートや授業に意欲的に取り組み、検定試験なども目標にしつつ自律的な学習スタイルを確立させ、高2の冬に英検1級に合格している。他にも、授業で学習した漢文の要約や感想を英語で書いてきたり、化学の実験の様子についての簡単なレポートを英語でまとめたりするなど、他教科の学習をうまく英語学習に取り入れる工夫が多くの生徒に見られた。

20 肯定証拠とは、伝えたい文意がうまく書けた表現や語彙・コロケーションや、効果的な論理展開などに対して波線を引いたり簡単なコメントを付けたりして、文法や語法など英語表現上適切に使用できたことを教師がフィードバックとして示すこと。

<生徒の自学ノートの取組例2 (2018年度高2時「取組例1」と同一生徒の1年後)>

TED Talks を活用し、視聴時のメモと要約・感想を英語で書いている。ページの上にはどの技能の学習に取り組んでいるかを示すタグ付けを付箋紙で行い、冬休みの学習をとおして学習方略や技能のバランスなどを振り返ることができるように工夫されている。明らかに、自律性や学習方略や内容、計画性や学習教材のレベルなどを自己調整する力の高まりがみられる。高2の冬は、ページ数の指定などはないが、この生徒は下の例にあるような質の高い取組を51ページにわたって行ってきた。こうした取組や培った能力が英字新聞記事を作成する際の下支えとなっていることは言うまでもない。

The image shows two pages of handwritten notes from a student's notebook. The left page is titled "TED その1" and discusses "Metal that breathes" by Boris Van Sluys. It includes a diagram of a building's thermal insulation and a summary of the talk. The right page is titled "TED その2" and discusses "What does my head can't mean to you?" by Sherry A. Klein. It includes a diagram of unconscious bias and a summary of the talk.

<生徒の自学ノートの取組例3 (自ら目標設定を行う)>

生徒は自主的な学習を行う前に自ら目標設定をし、振り返りまで行う。「英字新聞制作プロジェクト」においても英語学習においても、達成すべきタスクの期限を設定し進捗状況を管理したり、その取組を振り返って次の取組に生かしたりする姿勢や自己調整力は欠かせない。生徒一人ひとりがこうした取組をとおして自身の学習方略や主体性、自律性を高めていくことにより、探究的な学習や協働的な活動が成立する素地を養っている。

The image shows a page of handwritten notes titled "Summer's target" with a list of goals for the summer. The goals include writing, listening, and reading, with specific targets for each.

このほかにも、生徒自身で創作した物語を1600語程度で書き上げて提出した生徒や日本の新聞記事の要約や意見を書き寄せてきた生徒、ほぼ毎日その日に印象に残ったニュースを取り上げて数行の紹介文を約半年間にわたり自主的に続けた生徒など、書くことに関わる能力や意欲の高まりが感じられた。

こうした英語の授業や家庭学習における取組をとおして、生徒はある程度のまとまりのある英文、特に意見文や要約などを書くことに慣れてくるので、英字新聞制作の際にも効果的に効率よく活動に取り組むことができる。また、頻繁に英文を書く経験を積み重ねてきているので、普段自分が書いている意見文やエッセーなどと英字新聞記事のフォーマットやスタイルの違いを比較対照させてよりよく理解することが可能になる。

さらに、教師側のメリットとして、自学ノートを生徒の英語学習ポートフォリオとしてとらえ、家庭学習実態や、ライティングにおける生徒の典型的なエラーや言語材料の習熟の度合いを知ることができる点が挙げられる。生徒それぞれの2年間の取組の様子やライティング能力を把握したうえで英字新聞記事作成の支援を行うので、「この記事を書いている〇〇にはサジェスションを与えるだけで十分だ」「この生徒には、声をかけて個別に支援や添削が必要だ」などと、どの新聞記事作成チームに対してどの程度の支援を行えばよいか、より適切な判断をすることができた。

さらに、2017年度卒業生は、高2の12月にお茶の水女子大学准教授 David Allen 先生の協力を得て、パラグラフィティングに関する講義とワークショップを行っていただく機会を得ることができた。collaborative writing の手法を用いて生徒がペアまたはグループになり、各自で書いた英文を比較したり、協働的に1つの英文を完成させたりするなど、図表で表していることとそれに対する見解を英語で表現する方法について学習した。これは、図表を取り入れてニュースを取り上げたり協働的に英文作成を行ったりする新聞記事作成に大いに役立った。

3.3 グローバルな諸課題や名文・名スピーチに触れる機会の拡充

「2.4.2 Student 版原稿」で取り上げた英文記事の最後のパラグラフに Malala Yousafzai さんの国連でのスピーチが引用されている。生徒たちは、高2時に Malala Yousafzai、Steve Jobs、Kelly Macgonigal を扱った CD Book²¹ から1冊を選んで購入し、収録されている本人の講義や演説、対談を聞いたり、スクリプトを読んだりする家庭学習に取り組んだ。また、そこから得た情報や感想を授業中に英語で伝え合ったり、「3冊から1つ選んで後輩に進めるとすればどの人がよいか」について推薦文を書かせたりする言語活動を行ってきたことが、英字新聞記事作成にも生かされたと考えられる。さらに、前述の CD Book には収録されていない関連映像を自主的に視聴する生徒も多く、興味・関心の広がりや高まりが見られた。

英語科を含めた他教科で得た知識・技能などが探究的な学習や活動場面に行かされ

21 朝日出版社『生声 CD BOOK』のシリーズ3タイトルより選択させた。

たりその逆のケースが起きたりすることで、そうした知識・技能のより一層の高まりと思考力・判断力・表現力等の伸長が期待できる。今後も意図的・計画的な取組をとおして他教科や「総合的な探究の時間」との連携を深めていきたい。

3.4 ライティング能力の高まりの検証 (GTEC Writingの結果より)

本校では、GTEC²²を高1および高2の12月、高3の6月に受験している。高3時に英字新聞制作を始める時点での生徒のライティング能力、また、本章で取り上げた取組の効果についてGTEC Writing²³のスコアを見ておきたい。推移については、「3 英語の授業における取組」で取り上げた2017年度卒業生のデータとする。

高3生の全国平均スコアは203であり、右の度数分布表を見ると、本校生徒の平均スコアは244.7である。高2の12月の時点で高いライティング能力を有することが分かる。また、度数分布を見ると分かるように、多くの生徒がライティング能力を底上げしてきた。こうした高い力は、英字新聞記事作成に生かされ、また英字新聞記事作成をとおしてさらにその能力を高めていったと考えられる。

年度	2016		2017	
学年	高1時		高2時	
受験人数	117		116	
平均スコア	238.9		244.7	
平均CEFR-J	A2.2		B1.1	
満点	270		320	
CEFR-J(人数)	単純	累積	単純	累積
B2			1	1
B1.2	15	15	31	32
B1.1	63	78	57	89
A2.2	19	97	16	105
A2.1	14	111	8	113
A1.3	6	117	3	116

4. 成果と課題

4.1 生徒の自己評価(SGH意識調査及び『探究II』の1年間の活動振り返りシートより)

各年度ともにおおむね同様の傾向を示しているが、ここでは「3 英語の授業の取組」と同様に主に2017年度卒業生の自己評価(SGH意識調査²⁴)の結果を中心に取り上げる。

初めて「英字新聞制作プロジェクト」を行った前年度の課題として「英文記事のフォーマットで英語を書くことへの生徒の習熟」が挙げられた。したがって、英語のライティングに関する指導や十分なガイダンスを英語科の授業で行ったり、関連資料や図書館で保管期限を過ぎた新聞やトピックや書きぶりの参考になる新聞の切り抜きを教員が年に3～4回作成して配布したりするなど、英語ライティング能力の充実や新聞記事フォーマットの理解の支援に努めた。

22 GTECとはベネッセコーポレーションが開発・運営しているスコア型4技能英語検定のことである。

23 GTEC Writingでは、社会的話題などについて意見やその根拠を20分以内に英語で書かせるライティング問題が出題され、採点はトレーニングを受けたネイティブが行っている。

24 本校のSGH研究開発で伸ばしたい資質・能力に基づき2014年に独自の質問項目を設定し、筆者が原案を作成した。改良を加えて2018年度まで全学年で年2回調査を行った。詳しい調査項目や結果については、本校WEBページ「SGHについて(SGH報告書)」より参照できる。(<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/sgh/report.html>)

< SGH 意識調査結果抜粋（※数値は高3生の4月→1月の回答の割合の変化を表す。） >

- (1) まとまりのある英文を書く力について
「トピックが既知であればまとまりのある英文を書ける」という項目で「だいたいできる・できることもある」と答えた生徒の割合：47.0% → 62.2% (+15.2%)
- (2) 成果発信への意欲の高まりについて
「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」という項目で「大変・ややそう思う」生徒の割合：89.0% → 94.6% (全学年で唯一9割を超えた)
- (3) 英語で議論する力について
「既習の話題や経験の範囲内なら抽象的でも英語で議論できる」という項目で「だいたい・できることもある」と答えた生徒の割合：39.5% → 54.0% (+14.5%)
- (4) 英語でプレゼンを行ったり質疑応答したりする力について
「事前に用意された英語のプレゼンテーションを流ちょうに行え、質問にも対応できる」という項目で「だいたい・できることもある」と答えた生徒の割合：31.1% → 43.2% (+12.1%)

英字新聞作成をとおして成果発信の意欲を高め、英語で表現することに自信をもち、英語で話すこと・書くことに対する自己評価が高くなっていることが分かる。教育課程編成の都合上、本校では、高3時に全員履修として一斉クラスで行う英語科の科目がない。『探究II』が上記の学年全体としての結果に良い影響を与えたと考えられる。また、高2時までの英語科の授業における取組や支援も、生徒が大きな抵抗感を持たずに新聞記事作成に取り組めた要因となっていると考える。

次に、入学時から卒業時の自己評価の推移について、英字新聞制作プロジェクトに関わって肯定的な回答の割合が顕著に増えた²⁵項目を以下に3点挙げたい。数値は、2017年度卒業生のSGH意識調査の高1第1回（5月）と高3第2回（1月）の変化を示す。

< 3年間で自己評価の肯定的な回答の割合が顕著に増えた3項目 >

質問項目	高1の5月	高3の1月
①「探究成果や解決策の提案、意見などを効果的に聴き手に伝えられる」	55.4%	71.2%(+15.8%)
②「学んだトピックや経験の範囲なら抽象的でも英語で議論ができる」	16.7%	54.0%(+37.3%)
③「そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける」	28.3%	62.2%(+33.9%)

*①は、「大変そう思う」+「そう思う」の割合。②・③は「だいたいできる」+「できることもある」の割合。

25 パーセンテージで15ポイント以上増加した項目を「顕著に増えた」とした。

①「探究成果や解決策の提案、意見などを効果的に聴き手に伝えられる」については、当該年度の卒業生はSGHカリキュラムが整備されて入学してきた最初の学年でもあり、『探究Ⅰ・Ⅱ』や教科の授業などさまざまな場面で言語活動を充実させてきた成果であると考えられる。②「学んだトピックや経験の範囲なら抽象的でも英語で議論ができる」については、英語科の授業などにおいて、技能総合型の言語活動を積み重ねてきた成果であると考えられる。また、③「そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける」については、『探究Ⅱ』で「英字新聞制作プロジェクト」や英語の授業や自学ノートなどをとおして生徒がまとまりのある英文を自発的に書くことに慣れ親しみ、パラグラフライティングに習熟してきた成果であると考えられる。今後は英字新聞以外のフォーマットで英文を書く活動も取り入れ、さらに多様な英文のスタイルに習熟させたい。

最後に、既習知識・技能の活用や、協働性・主体性の大切さについての気づき、自己の取組を振り返る力の高まりについて、1年間の『探究Ⅱ』の活動の振り返りシートに書かれた生徒の具体的な記述を見ておきたい。協働性や既習知識・他教科の学習との関連についてメタ的に捉えていることがうかがえる。

<取組全般に関わる生徒の自己評価より（※生徒の原文そのままを一部抜粋）>

- ・チームの中で少しでも役に立つことをしようと思いながら活動したら、苦手な英語を使っただけの活動もそこまで苦じゃなかった。
- ・最終的には私なりに良いものが出来上がったのではないかと自負しています。思いのほかメンバーの皆が協力的で初めに立てた計画から大きく外れることもなかったことです。他チームの記事や他



初年度の取組の課題を改善し、新聞記事作成前に各自の『探究Ⅰ』の成果について情報共有を行う目的で2年時の探究成果を高3の4月に全員が英語で報告した。

クラスにも負けていないと思います。

- ・記事を実際に作成する前にチーム内での理解を深め、伝える要点を確認し、出来上がり後の理想形を全員が共有することが記事作成の際のポイントだと思いました。
- ・2年生の時の『探究Ⅰ』や1年次の『情報』で学んだことを生かし、信頼できる情報を収集し、論理的な文章を書き上げるということはよくできたと思う。
- ・各自の分担をきっちりやってチームでは議論や軌道修正、改善をするという姿勢で臨むとグループ作業はうまく行く。

4.2 英字新聞甲子園の結果

制作した各クラス（3紙）の新聞²⁶は英字新聞甲子園に出品している。結果は以下のとおりである。回数を重ねるごとに過去の新聞制作の課題や改善点を踏まえ、また、先輩の制作した新聞を参考に新聞制作を進められるようになってきており、その成果が結果につながっていると考えられる。

- ・2016年度 第1回英字新聞甲子園 Foreign Media Prize 受賞
- ・2017年度 第2回英字新聞甲子園 準優勝1紙
- ・2018年度 第3回英字新聞甲子園 優勝1紙、準優勝1紙

5. おわりに（もし『探究II』を発展させるとしたら…）

英字新聞制作を3年間の英語学習および探究的な学習やPBLなどの学習活動のアウトプットの1つとしてとらえた場合に、どのような可能性が考えられるだろうか。現実的な制約や実現可能性をあえて考慮せず、この3年間の取組の成果を最大化するための教科横断的私案を述べ、まとめにかえる。

高2生の『英語表現II』（『論理表現II』2単位）および「総合的な探究の時間」（『探究I』1単位）の3学期を英字新聞制作プロジェクトに充て、英字新聞制作を開始する。また、高3時は、従来の『探究II』に相当する1単位時間に加え、引き続き『英語表現II』（『論理表現II』）の2単位を英字新聞制作に充当する。その結果、制作自体を高3の1学期で終了し、制作後の活動を2学期に十分に行えるようになる。

具体的には、2学期冒頭より『英語表現II』では、Student版（自作原稿）とProfessional版（GEICによる校正原稿）を比較し、英文の構成や語彙、スタイルによる表現方法の違いを振り返り、制作した新聞の自己評価を行う。さらに、新聞制作全体や個々の記事に関して学級を横断してプレゼンを行ったり、外部より留学生（お茶の水女子大学の留学生など）を招聘したりするなどして、記事で扱った問題やテーマについてディスカッションを行う。2学期末には、次年度に英字新聞制作を行う2年生へのガイダンスを兼ねて代表チームや編集部が英語でプレゼンを行う。

一方、『探究II』では、これまでの探究全体を振り返るとともに（自己評価）、自分たちが取り上げたテーマや記事の内容に関連する新聞記事やニュース、論文などを海外のサイトや過去の大学入試の英文から探し、それらを読む活動を2学期末まで行う。読後に要点を日本語や英語で書いてまとめる活動を行い、より深い内容や専門知識・語彙の理解を促す。

「大学入試」（入試改革により大学入試もだいぶ様変わりしたが）を言い訳に何十年も変わらない「受験英語」指導や学習指導要領を無視した瑣末な文法項目の暗記や演習、難解で例外的な英文構造の解釈に終始する授業や学習に比べれば、「確かな基礎

26 各クラスで制作した過去3年間の新聞については、以下のWEBサイトより参照可能。

(<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/school/search.html>)

学力と広い教養」²⁷そして「4技能のバランスの取れたより高い英語力」を身に付ける1つの案として効果的ではないだろうか。

「英字新聞制作プロジェクト」は真正な言語活動を保証し、ゴールやタスク、その基準が明確である。これは、英語科の指導や言語活動をデザインする際にも大変重要である。また、小規模校（学年3クラス120名）のスケールメリットを生かし、生徒の自主性・自律性を重んじる校風ともマッチングした取組として成果を上げてきたが、できるだけ上級学年で実施することにより既習の知識・技能や主体性、協働性などの資質、学校行事等の経験、他教科の学習成果を生かした取組としてこのような探究的な学習を取り入れることができた。広く「総合的な探究の時間」や英語科の指導においても有効であると考えている。

『探究Ⅱ』に限らず、探究的な学習や活動は多くのサポートやノウハウの蓄積を必要とする。「英字新聞制作プロジェクトを活用した探究成果の発信」を共に作り上げた先生方や関係の方々、そして生徒たちに感謝したい。また、SGH 研究開発の指定は終了したが、2019年度も英字新聞制作プロジェクトは続く。「探究的な活動を行うこと」自体を目的化することなく、身に付けるべき知識・技能の定着に効果的であったか、思考力・判断力・表現力等や主体的に学習する態度を高めるうえで有効であったか、絶えず生徒の実態をよく見て検証していきたい。そして、この研究開発から本校の教育活動のどこに何を残せるかを「英字新聞制作プロジェクト」の担当者として、また、「主体的・対話的で深い学び」を促す技能統合型の言語活動をより多くの学校の英語の授業で成立させるにはどうしたらよいかを英語教師として引き続き考え、発信していきたい。

27 本校のSGH研究開発の目標の1つとして「確かな基礎学力と広い教養を身につけ、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒」を育成するとしている。詳しくは、本校WEBページ「SGHについて（本校のSGH概要）」を参照。

（<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/sgh/outline.html>）

【別表1】『探究II』マスタールーブリック

- ・本ルーブリックは、年間指導計画の評価の観点能力記述文で具体化したものである。
指導や活動の際の目的や目標の目線合わせを行ったり、指導計画を見直したりする際に用いる。
- ・評価場面における具体的な評価基準については、このマスタールーブリックを基に作成する。
- ・評価の観点は、以下のとおりである。（具体的な評価場面は、「年間シラバス」を参照。）
①「批判的思考力」 ②「協働的思考力」 ③「創造的思考力」
- ・外部指標による客観的評価と連動させるため、ルーブリックを作成する際には、GPSアカデミックテストの「CAN-DOリスト」を参照する。
- ・最終的な評価（通知表・要録）は、生徒個別に文章で記述する。
- ・生徒の具体的な活動場面、成果物等を基に、ルーブリックを随時修正する。（年間2回をめやす）

	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力
	情報の抽出や吟味	他者との共通点・違いの理解	情報・知識の関連付け
	論理的表現	人との関わり・集団への主体性	問題把握と具体的解決
S	<ul style="list-style-type: none"> □ 記事や編集の目的に応じて、探究Iや他教科で使用した資料を探し出し、情報を取り出すことができる。 □ 情報の背景や読み手の立場を踏まえて内容の正しさを適切に判断できる。 □ 資料や既習の知識・技能を活用して、読み手を意識した説得力のある記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を具体的に示しながら表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観の違いを理解するとともに、集団で取り組む際の個々の生徒の強みを生かし、弱みに配慮した取組ができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・洗練・修正などして建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に主体的に集団に関わり、他者と刺激し合いながら解決策を検討できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 既習の知識・技能・経験等を組み合わせて解決すべき問題を特定し、複数の解決策を提案・比較検証したうえで、最善の解決策を選択できる。 □ 記事の基となる情報や背景を踏まえるとともに、他の問題解決に際してそれまで問題解決のプロセスや解決策を応用できる。 □ 見通しをもって同時に複数の問題の解決に当たることができ、他のチームや他クラスの取組も参考に効果的で実現可能性の高い解決策を提案することができる。
A	<ul style="list-style-type: none"> □ 探究Iや配布された資料から、目的に応じて情報を取り出すことができる。 □ 情報の正しさを客観的に判断できる。 □ これまでの資料を踏まえて、又は指示や支援があれば既習の知識や技能を活用して、読み手を意識した記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を示して表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観の違いを理解し、集団で取り組む際に個々の生徒の強みを生かした取組ができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・修正して、一定の条件下で建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に主体的に集団に関わり、アイデアを出し合いながら解決策を検討できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 既習の知識や資料を基に解決すべき問題を特定し、複数の解決策を提案・比較検証したうえで、よりよい解決策を選択できる。 □ 他の問題解決に際してそれまで問題解決のプロセスや解決策を振り返り、応用できないか検討することができる。 □ 同時に複数の問題の解決に当たることができ、他のチームの取組も時に参考に効果的な解決策を提案することができる。
B	<ul style="list-style-type: none"> □ 編集部や教師の指示や支援があれば、情報を取り出すことができる。 □ 情報を分類・区別して評価できる。 □ これまでの資料を踏まえて、読み手を意識した記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を示して表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における価値観の違いを理解し、集団で取り組む際に生徒間で協力して取り組むことができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・修正して、一定の条件下で建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に集団に協力し、他者とともにアイデアを出し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 一定の条件に従って、解決すべき問題を特定し、複数の解決策の中から自分たちなりの解決策を選択できる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、他の問題解決に際してそれまでの問題解決策を振り返り、解決策が適切か、検討することができる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、複数の問題の解決に当たることができ、解決策を提案することができる。
C	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援に従って情報を取り出したり、評価したりすることができる。 □ 何らかの主張や根拠を表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観、生徒間の考え方の違いを理解することができる。 □ 指導や支援に基づいて、アイデアを修正して、一定の条件下で合意形成に参加できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に集団の活動に指導や支援があれば協力できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援に従って、解決すべき問題を特定し、自分たちなりの解決策を選択できる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、解決策が適切か、検討することができる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、問題の解決に当たることができ、解決策を提案することができる。
D	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援があっても情報を取り出したり、評価したりすることができないことが多い。 □ 表現することができない、又は評価外。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観、生徒間の考え方の違いを理解したり、アイデアを修正したり、集団の活動に協力したりすることの必要性は理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 自分なりの観点で何らかの解決策を選択したり、他者の提案に同意したりすることができる。 □ 具体策を見い出せない、又は評価外。

【別表2】『探究II』年間シラバス

4月の計画に入っているが、『探究II』のガイダンスは高2の学年末、3月に実施している。この際に、『探究I』の成果の要旨を英語で書いてくることが課題として出され、その共有を行うところから4月の『探究II』の授業が開始する。

■年間活動スケジュール案

注1 「評価の観点」の①～③の内容は次のとおりである。①批判的思考力 ②協働的思考力 ③創造的思考力

評価対象は、英字新聞・記事、ノート・授業中の取組の様子、自己・相互評価シートとする。

注2 「評価の観点」の記号のうち、◎は最重要項目、○は重要項目であることを示す。

月	単元名と単元のねらい	活動	主な学習活動とねらい（活動目標）	評価の観点		
				①	②	③
4	◇講座ガイダンス	○クラス別ガイダンス ○小グループでの話し合い ○クラス全体での共有	・春休み前のガイダンス、春休みの課題（探究Iの英文アブストラクト）を小グループで共有する。（英文の評価と日本語の説明） ・教師の説明を聞き、『探究II』の取組のねらいを理解する。 ・過年度の「総合的な学習の時間」の取組について、成果と課題を共有する。	5		4
5	◇チーム（記事を書く記者グループ）を決めよう	○小グループでの協議 ○テキストを用いた学習（新聞記事の種類と目的）	・編集部を編成し、クラスごとに生徒が主体的に取り組めるような組織作りとガイダンスを行う。 ・新聞の書き手としての視点や読み手を意識して新聞の大テーマを話し合い、新聞づくりの目的を共有する。 ・新聞記事の種類や必要な視点について理解する。	○	5	
6	◇取材・情報収集を行い、記事原稿を仕上げよう	<1チーム3～5人で活動> ○過去の総合的な学習の時間や教科の学習で作成したレポートや論文、資料の見直し ○必要な資料や図表、データの洗い出し ○新たに必要ない取材先やデータ収集方法の確認・企画立案 ○編集部との記事内容や取材方針のすり合わせ	・動画やテキストを用いて、取材方法や英文による記事の書き方について理解する。 ・各チームと連携し、コミュニケーションを図りながら、記事の重複や方向性について検討を重ねることができる。 ・編集部は、各チームの記事や設定した大テーマと記事の関連など、全体を見通した立場や視点から各チームにアドバイスをしたり必要な作業を促したりすることができる。 ・チーム内で記事の内容や表現の仕方、データや資料の客観性などについて検討し、記事を書くことができる。 ・フィールドワークのアゴ取りや実験、校外学習時の外部機関への対応などの既習の知識や技能を活用し、必要に応じた取材や調査を行うことができる。	○		5
7	◇紙面割を決めよう	○ここまでの取組に関する自己・相互評価 ○クラスごとに編集部原案に対して意見を出し合い、紙面割を確定 ○紙面割を基に、記事の推敲・再編集計画の立案	・チームとしての取組やチーム内のメンバーの取組について、示された観点を基に自己・相互評価をして、改善点を見出すことができる。 ・自チームの記事と新聞全体のバランスの両方を考慮した上で、新聞紙面割確定というゴールの達成のために建設的に議論をすることができる。 ・これまでの取組の成果と課題から効果的なチームの業務計画（夏休み中に進めるべき作業等について）を立案、実行することができる。	○		5
9	◇クラス新聞を発行しよう	○大テーマごと、大テーマ間、新聞紙面全体など、様々な視点やグループ形態による新聞紙面や記事の最終推敲 ○新聞全体の読み合わせ ○The Japan Times編集部（GEIC）との紙面校正のやりとり	・異なる集団や形態でも目的を理解し、目標を達成するために協働的に他者に関わって課題を解決することができる。 ・英語科で学習したライティングや既習知識を活用して、新聞の推敲をすることができる。 ・必要な内容や改善点、要望などをメールや電話、直接の交渉などの場面に応じたコミュニケーションスキルやマナーを用いて伝えることができる。 ・編集部としてリーダーシップを発揮し、各チームをまとめ、1つの新聞を期日までに完成させることができる。	5		○
10	◇記者解説を聞いて新聞を読み合おう	○記事を担当したチーム（記者）による記事作成の意図や伝えきれなかった情報について英語で行うプレゼンテーション ○他クラスの新聞の鑑賞	・英字新聞の外部コンテストに応募する（予定）。 ・プレゼンテーションソフトやフリップを活用して各チームで英語で要点や作成の背景、補足的な情報を英語で伝えることができる。（聞き手として留学生や大学生など高校生以外を対象に発表できる機会があるとよい。※検討中） ・プレゼンテーションを聞いたり記事を読んだりして、記者に対して端的に英語で質問や感想を伝えることができる。 ・プレゼンテーションや新聞全体の出来について、自己・相互評価を行う。	○		5
11	◇新聞作成のプロセスを振り返り、作成のコツをまとめよう	○次年度の後輩に向けて、作成プロセスを振り返って作業やチームワーク、クラス全体の協働的な取組を行う上でのポイントをまとめる作業	・これまでの新聞作成プロジェクトのプロセスで残した資料や記録を基に、作成の際のポイントとなる事柄をチームや個人、編集部やクラス全体などの複数の視点から端的にまとめることができる。	○		5
12	◇探究IIの取組をまとめ、自己評価を行おう	○自己評価と活動後レポートの作成（個人）	・新聞作成で得られたものや気付いたことなどを、「コミュニケーション」、「論理的・批判的な思考」、「ジャーナリズム」、「英字新聞」などのキーワードを基に振り返り、活動後レポート（A4版1枚程度）にまとめることができる。	5		○

備考 ・主担当教員が、活動案や全体のカリキュラムデザイン、編集部長（各クラスに編集部を編成）の生徒への主な指導・指示を行う。
・各クラスに1名の担当教員が付き、活動の支援や編集部への指導を行う。

参考文献

- 1) Hattie, J.A.C.(2008) *VISIBLE LEARNING:A Synthesis of Over 800 Meta-Analysis Relating to Achievement*. London:Routledge
- 2) 国立教育政策研究所 (2016) 『資質・能力 [理論編]』、東京：東洋館出版社
- 3) 三宮真智子 (2018) 『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』、京都：北大路書房
- 4) 染谷泰正 (2009) 『オンライン版「英文語彙難易度解析プログラム」(Word Level Checker) の概要とその応用可能性について』、青山学院大学文学部紀要
- 5) 中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史 (2017) 『「プロ教師」に学ぶ真のアクティブ・ラーニング “脳働” 的な英語学習のすすめ』、東京：開隆堂
- 6) 中條清美・長谷川修治 (2004) 『語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学英語入試問題の難易度』、日本大学生産工学部研究報告 B, 2004 年 6 月第 37 巻, pp. 45-55.
- 7) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領及び同解説外国語編・英語編』、文部科学省